



へき地・小規模校のソフトバレーボール授業の事例 研究：チームの課題を手がかりに

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉本, 匡矢, 小出, 高義 メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/10060

へき地・小規模校のソフトバレーボール授業の事例研究

— チームの課題を手がかりに —

杉本 匡 矢
(旭川市立第二中学校)

小出 高 義
(北海道教育大学旭川校)

A Case Study of Soft Volleyball Class in Rural Small School — To clue the problems of the team —

Masaya SUGIMOTO

Takayoshi KOIDE

【概要】

小規模校の体育授業においては、少人数であるが故に集団スポーツは敬遠されがちであるが、そこを乗り越える指導が求められる。今回は小規模校におけるグループ学習から、話し合い活動を活性化させる手立てを講じることでチーム意識を高め、限られた時間内でバレーボールの特性に迫る授業づくりを目指した。そこでの単元計画を示すとともに、毎時間の活動の様子を明らかにすることで、授業内での子どもたちの変容を分析した。本実践からは、チームスポーツをあまり経験していない子どもたちが、チームの目標に向かって話し合い、練習から試合を通して、チームスポーツの良さに触れさせることで、毎時間の授業の満足度が高まったという結果が得られた。さらに、学級担任に授業を観察してもらい、これまでの体育学習での子どもたちの姿と比較する中で、本実践で有効であった指導について意見を求めた。これらの内容が、小規模校における集団スポーツの授業づくりの一助となることを願って報告するものである。

1 問題の所在と研究の目的

へき地・小規模校では、全校合同で体育授業を行ったり、近隣の小規模校が集まる「集合学習」の中で集団ゲームを取り入れたりするなど、学習集団を大きくする取り組みがなされている。けれども、全校合同の体育授業では1～6年生が一緒に学習するため、単式学級に比べ運動経験、技能差、体格・体力差が大きく、低学年に負担がかかり、高学年では下の学年に合わせ力を出し切れないことが懸念される。また集合学習は、年に数回程度しか実施できず、日常の体育授業に取り入れることは難しい。

このような中、少人数での学習が余儀なくされると、人間関係が固定化されやすいために「多様な発想や思考の交流が不足し、集団思考を通じて思考の深化が期待しにくい」ことや、「児童は教師依存になりやすく、児童の中で低迷する雰囲気を作りやすい」ことが課題とされている。(全国へき地研究連盟、1998) また、「少人数学級では授業中の話し合い活動における意見そのものが少なくなる傾向にあり、授業内容の広がりや理解・思考の深まりが生まれにくく、他者からの視点をもとに自分の考えを発展させる場面を作り出すことが難しい」(高瀬ら、2014) という指摘もある。このようなことから、へき地小規模校では、互いに意見を出し合いながら思考を深めたり、教え合いながら知識や技能を習得したりする協働的な学習に困難さを感じられやすい。

けれどもこれらの問題は、教師が発想の転換をすれば克服できるのではないか。これについて玉井は、「小規模であっても、異質な能力を含めたチーム力を高めるための集団的な関係性と運営方法を意識的に追究していけば、むしろ小規模性を逆手にとって、新しい発達の条件をつくることができる。」(玉井、2015) と、その可能性について指摘している。

一方、学習者の数が少なければ、教師が指導していてもそれぞれの学習状況が把握しやすく、一斉指導もしやすいと考えられる。そのような中、少人数をさらに少人数のグループ化し、学習を進めることに意味を見出せる教師はどれだけいるであろう。これについても玉井は、少人数学級におけるグループワークの有効性を指摘している。そこでは、「子どもたちの学習到達度の平準化や、自発的な授業参加意欲の向上が期待できる」(玉井、2012) としている。ここからも、へき地・小規模校における体育授業では、グループ学習がどのように有効であるのかを明らかにする必要がある。

よって本研究では、少人数学級の体育学習における集団スポーツのよりよい指導法をグループ学習に求め、小学校高学年の「ソフトバレーボール」の授業を実践した。ここでは、少人数学級でのグループ学習の有効性を、チームごとのめあて学習を通して明らかにしたい。

2 方法

2.1 実践対象

北海道旭川市立雨紛小学校 第5・6学年 男子2名
女子5名 計7名

2.2 実践期間

平成27年11月19日～平成27年12月8日 全6時間

2.3 実践方法

本授業計画から実践した授業記録と、授業観察者の客観的な意見を手がかりに分析を加えることで、少人数学級におけるグループ学習の有効性を明らかにする。

2.4 授業実践者

杉本匡也（北海道教育大学教育大学 芸術保健体育専攻 保健体育分野4年）

3 単元計画および指導案

3.1 単元名

球技 ネット型 「ソフトバレーボール」

3.2 単元について

3.2.1 運動の一般的特性^{※1)}

バレーボールは、ネットをはさんで向き合ったチーム同士が、3回以内の触球でパスやアタックを有効に活用し、状況判断しながら集団対集団の攻防を繰り返す中で、相手コートにボールをいかに落とすかで得点を競い合うことが楽しい競技である。

3.2.2 子どもから見た特性を踏まえた指導観

対象児童7名に対して事前アンケートを行った結果「ソフトバレーボールが好きですか?」という質問では「大好

き」と答えた児童が1名、「好き」3名、「どちらでもない」2名、「嫌い」1名という結果となった。「大好き・好き」と答えた理由として「楽しいから」というものがあった。「どちらでもない・嫌い」と答えた理由は「あまりやったことがないから・楽しくないから」というものであった。

児童たちは、普段の学校生活において、休み時間などに体育館やグラウンドで元気に遊んでいる姿は見られるが、放課後にスポーツ少年団や習い事などで体を動かしている児童は1人もいなかった。ソフトバレーボールは、やったことがない児童が多かった。

対象児童である7名は6年生が6名、5年生が1名という編成である。この授業実践では、仲間と協力して活動することの意義や楽しさを感じることができるような場面を与えたいと考えた。

3.3 単元の目標

3.3.1 技能

- ・ボールを待つときの構えや、パスを出す際の体の向きなどを身につける。
- ・ボールを片手や両手で操作して、仲間とパスをつないだり、相手コートにボールを落としたりすることができる。

3.3.2 態度

- ・運動や「話し合い活動」に進んで取り組み、仲間と協力してソフトバレーボールに取り組むことができる。
- ・仲間に対するかけ声などを活発に行い、チームを盛り上げることができる。

3.3.3 思考・判断

- ・「話し合い活動」を通してチームに応じたためあてや作戦を立て、練習やゲームに取り組むことができる。

3.4 評価規準

運動への関心・意欲・態度	運動についての思考・判断	運動の技能
<ul style="list-style-type: none"> ・運動や「話し合い活動」に進んで取り組み、仲間と協力してソフトバレーボールに取り組むことができる。 ・仲間に対するかけ声などを活発に行い、チームを盛り上げることができる。 ・与えられたチームの役割に対して責任をもって活動することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「話し合い活動」を通してチームに応じたためあてや作戦を立て、練習やゲームに取り組むことができる。 ・チームの仲間に対して場面に応じたかけ声をかけることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボールを片手、両手で操作して仲間とパスをつないだり、相手コートにボールを落としたりすることができる。 ・ボールを待つときの構えや、パスを出す際の体の向きなどを身につける。 ・仲間のプレーをカバーする動きを身につけることができる。

3.5 単元計画

	学 習 活 動	◎課 題 ※留意点
第 一 時	単元の見直しをもつ ○オリエンテーション ○チーム分け、役割決め ○学習カードの配布、説明 ○パス練習 ○ゲーム ○チームの反省、次回の目標	◎バレーボールを行ってみての振り返りから、次回のめあてを決めよう ※ゲームを行ってみての課題を明らかにする
第 二 時	みんなで楽しく活動するためにはどうしたら良いか考えよう ○ウォーミングアップ ○話し合い活動 ○パス練習 ○ゲーム ○今日の反省、次回の目標	◎パスをつなげるためにはどうすればよいか考えよう ※「話し合いのルール」を徹底する ※「味方が取りやすいボール」「両手でのパス」を意識
第 三 時	仲間を励ましたり、チームを盛り上げたりするかけ声を考えよう ○ウォーミングアップ ○VTRを見る、話し合い活動 ○パス練習 ○ゲーム ○今日の反省、次回の目標	◎チームを盛り上げるかけ声、チームの仲間に対してのかけ声を考えよう ※前時の授業での <u>チームの仲間との関わり合い</u> をVTRで振り返る ※VTRから「ボールを待つときの構え」「パスを出すときの体の向き」を意識する ※チーム毎のめあてをホワイトボードに記入
第 四 時	仲間と協力してラリーの続くゲームを楽しもう① ○ウォーミングアップ（チーム毎） ○VTRを見る、話し合い活動 ○実践練習 ○ゲーム ○今日の反省、次回の目標	◎チームに応じたフォーメーションを選択し、実践しよう ※ <u>チーム毎に準備体操</u> ※「 <u>かけ声シートの活用</u> 」 ※ <u>フォーメーションの選択</u> ※「 <u>上級者の試合</u> 」「 <u>自分たちの試合</u> 」をVTRで見る
第 五 時	仲間と協力してラリーの続くゲームを楽しもう② ○ウォーミングアップ（チーム毎） ○話し合い活動 ○パス練習 ○実践練習 ○ゲーム ○今日の反省、次回の目標	◎味方同士でパスをつないで相手から得点を取ろう ※ <u>仲間でパスを回して得点をとることの意義を確認する</u> ※めあてを達成するための話し合いを行う ※パスの技能についてももう1度確認する
第 六 時	仲間と協力してラリーの続くゲームを楽しもう③ ○ウォーミングアップ（チーム毎） ○話し合い活動 ○パス練習 ○実践練習 ○ゲーム ○今日の反省、授業全体の反省	◎相手に勝つための作戦を考え、味方同士でパスをつないで相手から得点を取ろう ※「 <u>構え</u> 」「 <u>間のボールのかけ声</u> 」を意識

4 授業の実際

4.1 第1時の活動

授業の進め方について、学習カードを用いながら説明し、チーム内での児童の役割を決めた。活動の展開場面では、1人に1球ボールを与え、直上パスを行った。ここでは、児童に片手打ち、両手打ちの様々な打ち方を行わせるとともに、2人組での対人パスを行わせた。次に、サーブを下から両手で投げ入れるというルールでゲームを行った。(ネットの高さは155cm)

ゲーム中の児童の様子から、次の4点の改善点を全体で確認した。

- ① 女兒がサービスを行った際、相手コート内のネット側ですぐ落ちてしまい、それが得点になるといったことが何度か続いた。
- ② 味方同士でのボールをお見合いしてしまう場面があった。
- ③ ラリーのなかでのボールの打ち合いが続いたものの、相手から来たボールを味方にパスすることなく相手に返すことの繰り返しが行われ、ボールに関わる児童が限定されていた。
- ④ ボールに関わることのない児童が、その場に立ちっぱなしといった状況も見られた。

活動のまとめでは、1班ではチームのメンバーが円になって話し合い「なるべくたくさんパスを回す」というめあてを、2班では児童間の距離が遠く、全員での話し合いになっていなかったものの「ボールをすすんでとりにいきパスを回す」というめあてを決め出した。

4.2 第2時の活動

まず、前時のチームのめあてをそれぞれ確認した。さらに「両手でボールを打つこと」を児童たちに意識づけた為、前時よりも両手でボールを扱う児童が増え、なかにはアンダーハンドパスやオーバーハンドパスに積極的に取り組む児童も出てきた。しかし、まだ、片手でボールを強く打っている児童が見られた。

次に、チーム毎に「円陣パスを何回続けることができるか」という活動を行った。その際チームで「パスをたくさん回すためにはどうしたら良いか」ということについての「話し合い活動」を行った。その後の活動では、自分の取り易いところにボールが来たら両手で相手に返すことができていたが、自分の取り難いボール、味方からの予想外のボールに対しては片手で対応していた。また、ボールを持たないときの立ち方、ボールの待ち方も改善が必要であった。何人かの児童たちが、円陣パスやゲームの中で膝を伸ばしたまま棒立ちの状態でボールを待っていた為、ボールに対する反応が遅れるという場面が見られた。

この活動の中で、円陣パスが途切れた際に、2班の中でお互いにボールをぶつけ合う児童がいた。これはその場で注意をしたが、自らの姿を振り返らせるまでには至らなかった。授業後にも児童同士の会話から「チーム替えをしたい」

「チームの実力差が合わない」といったような声が聞こえたのは、この件が少なからず影響していると考えられる。

ゲームの場面では、前時よりもネットを高くし(197cm)、サーブを下から両手で投げ入れるのではなく、ボールを打って相手コートに入れる通常のルールを採用した。時間の関係でサービス練習を行うことはできなかったものの、サーブは問題なく行うことができていた。

練習で取り組んだ「両手で味方にパスを出す」という動きについては、前時の授業ではほとんど見られなかったが、今回は少し意識されてきた。しかし、相手から来たボールに対してとっさに相手に返している場面のほうが多く、ボールに対しての構えがまだ出来ていない。

今回の話し合いでは、チームが円状になり仲間の顔を見て話すことや、「話し合いのルール」を指導した。このルールは、1人1回以上発言することや自分が発言するとき、仲間の発言を聞くときのマナーをまとめたものである。その結果、前時に比べてチーム全員が話し合いに参加している様子が見られた。その結果、その後の活動では、両チームからボールの回数をカウントする声が生まれていた。さらに、ゲームが終わった後のチームの反省でも、話し合いのルールは徹底できていた。「たくさんパスを回す」というチームのめあてに対しては、両チーム共にまだ未達成と認識していた。



写真1 グループでの話し合い活動

4.3 第3時の活動

前時での反省から、活動のメリハリについて指導した。これは、素早く次の活動に入ることができている児童を積極的に褒めることから、前時よりも素早く集合し、活動に入る児童の姿により運動量を確保できた。また、前時で決めたチームのめあては、意識しやすいようにホワイトボードに表示した。

さらに、授業の導入でパスをつなぐために「相手を取りやすいボールを打つこと」を強調した。「両手でボールを扱う」ことにこだわらず、相手がとりやすいボール、やわらかいボールをパスできるよう挑戦してみようといった指示

を出した。

前時に児童から出た「チーム替えを行いたい」という訴えに関しては、まず、授業者から見て両チームにそれほど戦力差がないということを説明した。次に、前時の授業のなかで、2班のメンバーが練習中にボールをぶつけあっている場面を映像で見せ、児童たちに「どうしてこうなってしまったのだろうか」という発問を行った。



写真2 全体で課題の確認

児童は明確な理由もなく、ボールを投げ合うまでに発展したようだ。その後重ねて指導しなかったものの、ボールを投げつけてしまった児童が、チームのメンバーに対し自ら謝罪していた。

映像を振り返りながら、チームのメンバーと協力して活動することの重要性について、児童たちにもう1度意識させた後、チームを盛り上げる、仲間に対して指示を出すなどの場面に応じた声かけを、チームで考えさせた。

その後、前時の授業でのゲームの様子を映像で確認した。映像を見るポイントとして「ボールを待っているときの姿勢」「パスを出すときの体の向き」という2つのポイントを提示した。ボールを待っているときに直立姿勢のまま動かない児童に対して「垂直!」「棒みたい」という声があがった。そこから、ボールを待つときの適切な「構え」について児童たちに考えさせた結果、足をある程度開く、ひざを曲げるということに気づかせることができた。「パスを出すときの体の向き」については、パスがうまくできていた場面を指摘し、パスを出す方向に体を向けることを意識して練習するように指導した。今回、児童たちが実際に活動している映像を導入に用いたことで、児童たちの興味・関心を引き出すことができ、課題に対し理解を深めることができた。

しかし、易しいボールを返そうという意識はあるが、ボール操作がうまくいっていないペアがあったので、上手なペアに全体の前でお手本を行わせた。お手本が終わると全員が拍手をおくり、行った児童たちからは笑顔がこぼれていた。そのお手本の効果か、ボールを丁寧に打とうとする意

識が全体的に強くなった。

円陣パスでは、前時にもめていた2班の児童たちの足が動くようになり、積極的にボールを取りに行こうという姿勢が見られた。1班の児童たちは、20回程度パスをつなげることができていた。

ゲームに入ると、前時よりもチーム内でのパスをつなげていこうと、仲間にパスを出すときの体の向きも変容してきたものの、ボールを待つ構えにはまだ向上が見られなかった。しかし、ゲーム中「ドンマイ」などの仲間を励ます声、「ナイスプレー」、「やったー」などの仲間と喜びを分かち合う声などがあがり始めた。

ゲーム後のチームの反省は、授業を重ねるごとに活発化し、全員が自分の思いを語ることが出来ていた。次回のチームのめあては「かけ声をかける、やさしいパスを出す」という2つが挙げられた。

4.4 第4時の活動

前時まで学級全体で行っていた準備運動を、チーム毎で行った。それぞれのチーム毎に「イチ、ニ、サン」とうかけ声により運動を行っていたが、それまでよりも時間がかかってしまった。授業の導入で、前時のゲーム映像を見せた。児童が得点したときに手を叩いて喜んでいる場面、仲間同士がハイタッチしている場面に注目させ、得点したときに喜びを表現することがチームに勢いを与えることを意識づけた。また、「かけ声シート」を用いて、児童たちの仲間に対するかけ声が盛んになるように工夫した。

次に、大学バレーボール部のゲーム映像を見せ、ボールを持っていない人の動き、3段攻撃を行っていること、ゲーム中に盛んに声が出ていることに注目させた。「話し合い活動」は、チームでパスをつなげるためのフォーメーションをチーム毎に考えた。

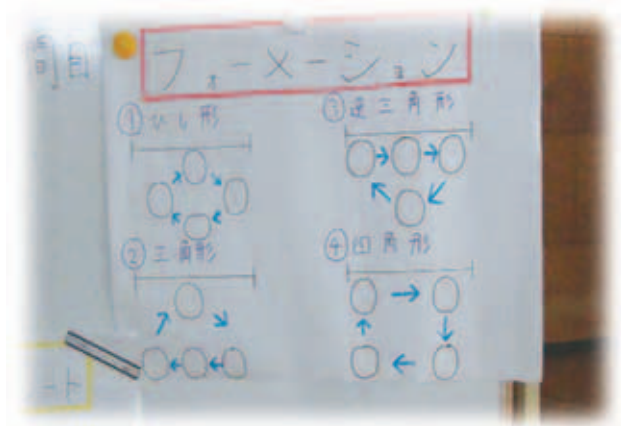


写真3 フォーメーション資料

練習では、導入で時間を使いすぎてしまったので、予定していた対人パス、円陣パスを省略した。そこで、相手からのボールをキャッチし、そこからパスを繋いで相手に返すという実践練習に入った。何回で相手に返すのかという

ことを、児童が理解できていない状態で練習に入ったため、最初は児童の動きが悪かったが、練習をすすめていくうちに、仲間とパスをつないで相手に返すというリズムと感覚をつかんでいった。

今回のゲームでは、味方同士でパスをつないで相手に返すという場面が増えた。特に、2班の児童たちの動きが良くなった。1班では、児童同士の空間が広く、間のボールをとることができず、男子児童が1人でプレーしてしまう場面が見られた。

仲間とパスを繋げるためのフォーメーションを考えさせたところ、1班は「いつもやっているから」という理由で四角形を、2班は「真ん中のボールがとりやすそうだから」という理由でひし形を選択した。

4.5 第5時の活動

前時の反省を生かして、チーム毎の準備運動を素早く行うよう呼びかけたところ、素早く行うようになった。

前時決め出した2班のめあての中に「〇〇くんがパスを回す」ということから「チームのみんなでパスを回して、相手から得点をとると、相手から来たボールを1回で返して得点をとるのでは、どちらがチームとしての達成感を得ることができる？」という発問をした。すると「みんなでパスを回すこと」と児童たちが答えた。その後、チーム毎の話し合いは、「早く話し合いが終わったチームから練習を始めてください」という指示により、それまでより、テンポの良いものとなった。

練習に入ると、1対1での対人パスを丁寧に行うよう膝を使って、相手にパスを出すことを意識させた。1時間目に「ボールをコントロールするのが難しい」と言っていた児童Aに対しては、個別指導を行った。少しでもうまくできたら褒めること、リズム良く練習を行うことで、相手が両手で取りやすいボールを返せるようになった。児童Aは、運動に対しての意欲はあるものの、できないことにより仲間に遠慮していたことも予想され、授業者のかかわり不足が反省された。

円陣パスでは、児童たちから「3段攻撃で、アタックする練習をしよう」と声が出て、自主的に円陣パスのなかで攻撃の練習を取り入れようという意欲的な姿があった。実践練習では相手からのボールをキャッチしてから、チームで3回ボールをつなぐということを明確にしたことで、前時よりも活発な練習を行うことができ、より実際のゲームに近い動きを練習することができた。

ゲームでは、これまで仲間あまりパスを出す場面が見られなかった男子児童たちからも、ボールをうまくコントロールしてパスを出している姿が見られ、チーム全員がボールに触れる回数が、それまでの授業のなかで1番多かった。また、チーム内でパスがつながることで、一体感が生まれ、チームの雰囲気は向上し、ゲームのなかでのよるこびの声や、励ましの声が自然と出ていた。



写真4 ゲームの様子

チームの反省や個人の反省では「今までの授業のなかで1番楽しかった」「今までで1番チームの統一感があった」という声があがった。加えて、「次はスパイクを下に強く打つ」という攻撃でのめあてを立てる児童も現れた。児童たちは、チームの雰囲気をつくりながらソフトバレーボールを行うという段階から、相手に勝つためにはどうするかという段階に移行した。また、1班の児童たちが「体力が尽きるまで練習して相手に勝つ」という、次回への意欲的なめあてを立て、徐々に児童たちの活動も盛り上がってきた。

4.6 第6時の活動

準備運動では、チーム毎に行うことに慣れ、自主的に行う事ができた。準備運動後に、「ボールを待つときの構え」「間のボールのかけ声」「仲間でパスを回して得点をとること」という前時の課題をもう1度確認した。また、児童たちの学習カードのコメントに「パスを回すことができて楽しかった」という記述が多かったことから、本時でもチームのみんなで得点するよう意識づけた。

練習のなかでは、チームのめあてを「間のボール、後ろにきたボールをしっかり取る」としていた2班の児童で、円陣パスの際に「間のボールの練習をしよう」という、チームのめあてに対しての練習を行おうとする活動がみられた。



写真5 チーム練習の様子

ゲームでは、相手から得点するために「低いボール打つ」ことを意識していた児童がいたが、「低いボール」を意識しすぎてボールがネットに当たってしまう場面があった。このゲームで良かった点としては、両チームとも味方が打ち損ねたボールを必死にカバーしようという姿勢が見られ、ボールに対して足を動かすことができていた。その為、チーム内でのパスの回数も増えて、仲間同士で盛り上がっている様子が見られた。また、ボールを待つときの「構え」についてもゲームをすすめていくなかで、多様なボールに対応するように自然に身についたと観察している。さらに、仲間に対するかけ声も具体的な指示や、励ましの言葉などが生まれていた。

ゲーム後のチーム反省では、話し合いの回数を重ねるごとに、チームのめあてがより具体的となり、一人ひとりの発言回数が増えていった。本実践で目指していた、教師が「今日の授業で取り組むこと」を提示し、チームの仲間同士でそれを達成するための方法などを話し合い実践する、また活動後にそれについての反省から次回のめあてを決めるという学習の流れを確立させることができたと感じている。

5 結果・考察

5.1 授業の満足度から

児童には、学習カードの欄に授業の満足度を100点満点で採点させた。全児童の毎時間の満足度の平均値をまとめたものが、図1の「児童の振り返りによる授業の満足度」である。

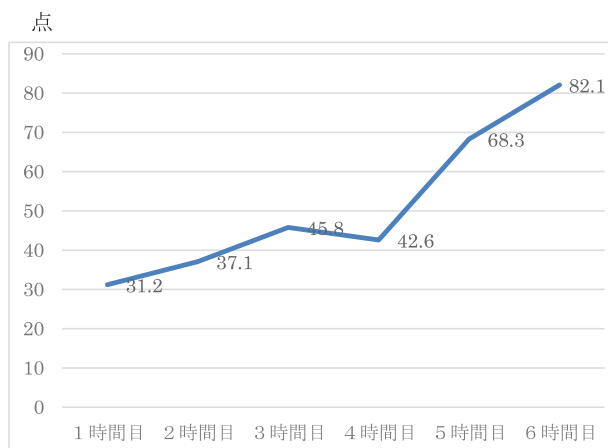


図1 児童の振り返りによる授業の満足度

ここからは、1時間目の授業で31.2であった「満足度」に関する数値が、6時間目では82.1 (50.9増)と大幅に上昇させることができた。授業者は、毎時間試行錯誤の実践であったが、イメージしていたソフトバレーボールのゲームにだんだん近づいていき、手応えを感じていた。

児童の記述からは「点が入ったときにうれしかったし、楽しかった」「パスが続いたとき」「アタックができた」「いっ

ぱいあって選べない」「いろんな場面がたのしかった」というものがあり、ソフトバレーボールの特性に触れられるようになってきたことが、この満足度に反映されているものと考えられる。

4時間目に平均値が下降した理由は、導入での映像による説明時間が長くなり、活動時間が長くとれなかったためと思われる。教師の願いを児童の活動に反映させたいものの、活動時間を割いてまで説明することは、反省すべき点である。少人数学級では、ボールに触れる機会や時間が多くなるが、それでも児童は時間いっぱい活動したいという思いを持って授業に参加しており、活動時間が少なくなることは、満足度が低下することに大きく影響するものと考えられる。

さらに、5時間目と6時間目にかけて急激に満足度の平均値が上昇したのは、4時間目の指導反省を活かして、出来るだけ活動時間を確保したことと、児童一人ひとりの上達とチーム力の高まりが相俟つたことと考えられる。

5.2 授業観察者からみた本実践

本授業実践を、教員歴10年の学級担任 (30代後半男性) に観察してもらった。事前打ち合わせから、様々な助言を受け、毎授業後も意見交換をかさねてきたが、6時間終了後に今回の実践についてのインタビューを行った。さらに、この回答内容を授業評価と捉え、そこに考察を加えていた。

5.2.1 ボールやネットの高さについて

- ・今回使ったようなやわらかいボールは、ボールを操作するなかでのケガのリスクがあまりなく、子どもにとっても扱いやすいので良かったのではないかと感じた。
- ・ネットの高さについては、最初はラリーが続かなかったので、子ども達にとって少し高いのではないかと感じた。けれども、ネットの高さに子どもたちが慣れてきたときに「ネットを越すようなボール」を打とうと意識していたのでちょうど良かったのではないかと感じた。

今回使用したボールは、ソフトバレーボールよりも柔らかくて軽いミニバレーボール (円周77cm、重さ50g) を使用した。ボールが柔らかいことで、ボールに対する恐怖心を抑えることができ、ボールが軽いことで、滞空時間が長くボールをより操作しやすかったのではないかと考える。

ネットの高さについては、実践の1時間目の際にバドミントンと同じ1.55mで実施した。小学生でもこの高さでは、ほとんど足を動かさなくても相手に打ち返すことができ、仲間とパスを回す必要感をあまり感じられなかった。そこで、ネットの高さを1.97mの高さに変更した。このことによって、相手にボールを打ち返すために求められる技能が増え、仲間とパスをつないで得点を取ったときの達成感が増したのではないかと感じた。

5.2.2 児童同士が声を掛け合うことについて

- ・授業者がうまく子供たちのかけ声を引き出していたのではないかと感じた。これまでかけ声を出すのが苦手な子供たちであったが、「かけ声シート」やゲームの中で授業者がすすんで声を出していたので、苦手ながらも積極的に声を

出そうとしている様子が見られた。今回は6時間で授業が終わってしまったが、その後7・8時間と授業が続けばもっと子供たちは声が出ていたのではないか。

今回は対象児童が7名だったこともあり、授業者もゲームに参加し4対4のゲームを行った。授業者自身がゲームに参加することで児童たちに積極的に声をかけやすく、ゲームの中で起こった良いプレーを取り上げることや、プレーをしているその場で、その日の課題を再確認しやすかった。

今回の実践を行った児童たちは、男子2名、女子5名でどちらかといえばおとなしい女子が多く、かけ声などを出すことが苦手な状況であった。しかし、児童たちに様々な場面でのかけ声を考えさせてそれを「かけ声シート」に記入することで、どんな場面でどんなかけ声を使えばいいのか理解することができたと考ええる。

また、ただ「かけ声を出していこう」と指示したのではなく、ゲームや練習のなかでそれぞれのチームからできた課題を解決するために「声を掛け合うことが有効である」と理解できたことが、声の高まりにつながったと思われる。

具体例では、2時間目の授業で「チームでパスを回す」というめあてのもとにゲームに取り組んでいるチームがあった。ゲームを行っていくなかで新たに、仲間同士の間のボールがとれないでパスが途切れてしまうといった課題が出てきた。その解決策を「話し合い活動」で児童たちに考えさせた結果「お互いかけ声を出し合う」という答えが出てきた。そこから次の時間に、場面にに応じて声がけによりボールを処理することで、ただやらされているだけではなく「必要感」をもって声を出すようになった。その後の授業では、ボールを呼ぶ声、仲間を励ます声が出るとともに、仲間との間のボールに対するかけ声がより出てくるようになった。

小規模校では、本実践のように授業者が子ども達といっしょにゲームに入り、ゲームを盛り上げていくことがしやすい。通常の学級では、複数のコートでゲームを展開するため、授業者が同時に全てのコートの子ども達を観察することや、声掛けを行うことが困難であると考え。そこで、その対策としては、少年団などでのバレーボール経験者、もしくは運動が得意な児童の「リーダーシップ」を育成し、それぞれのチームで自発的な活動が行われるようにすることである。授業者が見ていない場面でも、それぞれのリーダーが練習やゲームの場面で、仲間に対しての技術的なアドバイス、仲間を盛り上げるようなかけ声を積極的に言うことができれば、授業者が直接ゲームに入って子供たちに声をかけなくても、チーム全体を盛り上げることができる。また、そのような得意な児童が活躍する場面を、授業のなかで用意することも大切であると考え。

今回の実践でも対人パスがうまくできている児童が全員の前でパスを披露し、クラス全員で拍手を送る場面があった。お手本のパスを行った児童は、仲間からの拍手を大変喜んでいたし、パスの行い方のポイントをクラス全体で再度確認することができた。このような経験を積み重ねるこ

とが、クラスの仲間に認められたという体験を味わうことができ、チームを引っ張っていこう、仲間の良いプレーを引き出そうという意欲につながったと考えられる。

5.2.3 チームの中での人間関係、チームワークの変容について

- ・チームワークは練習や「話し合い活動」などを通して向上していった。「話し合い活動」を通して、ボールに対して消極的だった児童も自らボールを取りに行くようになり、また、チームのなかで仲間のプレーをカバーし合う動きも見られていた。
- ・体育で育んだ人間関係やチームワークを日常生活で生かすためには、学習カードのなかに日常生活につながるような項目を入れてみると良いのではないか。

本実践の6時間だけで、それまでの児童の人間関係を向上させるに至らないことは承知している。しかし、集団スポーツでは、仲間と協力しなければプレイが成立せず、勝利の喜びも味わうことが出来ない。そのためには、チームの仲間と意思統一をしなければならず、話し合い活動が必要となる。その必要感のある話し合い活動を経て、チームの高まりを感じられたとき、日頃の人間関係を越えたチームワークが成立するものと考えられる。

さらに、その活動に手応えを感じてくると、話し合いでは児童同士の意見交流が活発となり、仲間意識も高まるものと思われる。ソフトバレーボールにおいては、その仲間意識が仲間の打ち損ねたボールをカバーする原動力ともなる。

けれども、体育で育んだ人間関係やチームワークが、そのまま学校生活で発揮されるとは考えられない。学校生活で、今回のような人間関係を求める場面があったならば、体育での成功例を児童に思い出させ、その良さと価値について思い起こさせることで、少しずつでも定着していくものと考え。

5.2.4 本実践を通して気づいた点、改善点など

- ・サーブの打ち方や、打つ位置などの正式なルールを指導してあげられたら良かったのではないか。例えば、1セット25点などの公式戦と同じような形式でゲームを行ってみると子供たちも喜んだのではないか。
- ・しかし、今回のさまざまな実践を通して、子ども達の「バレーボール」に対するイメージが良い意味で変わったと思う。

サーブの打ち方については、児童に対して実施した事後アンケートのなかにも、「本格的なサーブがやってみたい」という意見があった。どれを「本格的なサーブ」とするかは判断が難しいが、ここで児童が答えた「本格的なサーブ」というのは、エンドライン後方からの得点する気持ちで打つサーブではないかと予想する。

本実践の1・2時間目は、児童がサーブを思い切り打って、相手がレシーブをすることができずに点数が動くという場面が多々あった。相手の取れないサーブを打つことで勝敗が決してしまっただけでは、ソフトバレーボールの楽しさを

味わうことが出来ない上に、レシーブ、トス、アタックといった技術も意味をなさなくなってしまう。

ここでは、ソフトバレーボールの正式なルールに無理に合わせようと授業づくりをしていなかった。これは、授業づくりのコンセプトが、正規のルールに児童を合わせるのではなく、児童に合わせルールを変更していく事を大切にしていたからである。全員がバックライン後方からサーブが入るようになるのにどれだけの時間を要するのか。それよりも、全員がゲームを楽しめる時間を確保することで、ソフトバレーボールの特性にふれることが出来るからである。その特性に触れることこそが、児童のソフトバレーボールにおけるイメージのマイナスからプラスへの転換に繋がるものといえる。

6 まとめ

本研究では、少人数学級の体育学習における集団スポーツのよりよい指導法を求め、小学校高学年の「ソフトバレーボール」の授業実践を試みた。ここでは、少人数学級でのグループ学習の有効性を、チームごとのめあて学習を通して明らかにすることを狙った。

少人数の学級においてもグループ学習は成立し、そのグループがトラブルを乗り越え、チームとして成長していく中で、ソフトバレーボールの特性に触れることが出来たと言える。ここでは、扱い慣れていないボールに慣れることと、そのボールをコントロールするために構え方や体の向きなどの技術的課題を乗り越え、チームごとにパスが通るようになったことが中核となっている。

これにより、ゲーム中における触球回数も向上し、よりソフトバレーボールらしいゲームとなった。これらのことから一時間ごとに、自分たちの向上を実感することが、授業の満足度を高めることとなった。

チーム課題を達成するためには、仲間との話し合いによる共通認識が重要となる。これを補う手立てとして「話し合いのルール」を明確にし、活動中のかけ声の種類を示した「かけ声シート」により、仲間とのコミュニケーションを高めることが有効であった。

少人数学級では、小さい頃から固定された人間関係のため、活発なコミュニケーションが図られていると思われがちであるが、今回の実践学級のようにおとなしい児童が多い場合は、積極的なコミュニケーションの必要性とその方法について理解しなければ、その向上は期待できない。

今後の課題としては、課題解決型学習に向けた指導の場面で予定していたよりも多くの時間を要し、活動時間を割いてしまった。この単元のみならず、体育学習において学び方や仲間とのかわり方は重要となる。1つの単元で解決できるものではなく、どの単元でも共通して指導したい内容である。そのような意味からも、さらに他の領域においても実践をかさね、へき地・小規模校における体育授業に有用な資料を提供できればと願う。

謝辞

本研究は、旭川市立立雨紛小学校横山校長先生の深いご理解により実践することができました。また、5・6年生の皆さんにも元気よく取り組んでもらいました。合わせて御礼申し上げます。

附記

本研究は、平成27年度北海道教育大学旭川校保健体育科教育学士論文として杉本が取り組んだ内容の一部をまとめ直したものである。

1、5、6は小出が、それ以外は杉本が担当した。

注

注1) 運動目的内容論の体育において永島悼正は、運動による心身や社会性への効果の違いに注目した運動の効果的特性、運動のしくみの違いに注目した運動の構造的な特性、そしてプレーヤーの欲求充足や必要充足の違いに注目したプレーヤーからみた機能的特性に分けられるとし、その中でも機能的特性が重要であるとしている。本論でも、この立場から機能的特性中心に一般的特性をまとめている。

引用文献

- 玉井康之 (2012) へき地小規模校における少人数・複式授業運営の基本的観点 へき地教育研究第67号 p.17
 玉井康之 (2015) “教育の原点”としての小規模校の特性とチーム力の活かし方 体育科教育 第63巻第2号 Pp.10-13
 へき地小規模校の体育授業におけるネット型の事例研究 (高瀬ら, 2014)
<http://hekiken.kus.hokkyodai.ac.jp/cont/k/kiyo/69/pdf/025.pdf>
 全国へき地教育研究連盟 (1998) 学習指導方法の工夫・改善 ～へき地・小規模・複式学級を有する学校の実践的事例～：東京

参考文献

- 大道等・頼住一昭編著 (2003) 「近代武道の系譜」
 佐藤善人・杉山哲司・鈴木秀人・山本理人編著 (2009) 「小学校の体育授業づくり入門」
 体育授業研究会 (2015) 「よい体育授業を求めて」—全国からの発信と交流—
 高田勇作 (2013) 「武道必修化に伴う剣道授業の在り方とカリキュラム検討～授業実践における生徒の思いを手掛かりに～」北海道教育大学修士論文
 若松優衣 (2011) 「バレーボール授業におけるめあて学習の有効性～一斉学習との比較から～」北海道教育大学旭川校保健体育科教育学士論文
 全国体育学習研究会編 (2008) 「楽しい体育の豊かな可能性を拓く」—授業実践への手引き—